カレーの市民と彼の知らないカレー店

市川司幸

そのカレー屋はとても見つけにくいことで知られていました。

N市の駅の北側の、飲食店が並んだ通りのその路地の、裏を回って隙間を縫って、くるんと払って引き返し、そして右へ一回・左へ二回曲がるとその店のあるビルに出くわします。

ただ、ここで安心してはいけません。そのビルのエレベーターはおんぼろで、カレー屋のある地下一階に行くボタンがありません。エレベーターに乗ったら、ボタンは何にも押さないで、靴で床をコンコンコンと三回叩きます。するとエレベーターは、お年寄りが腰をあげるときのようにゆっくりと下に向かい始めるのです。

こんな面倒な立地でしたから、N市の外からカレーを食べにくるお客はひとりもいません。

ガイドブックにも載っていませんし、検索をかけてみても出てきません。店名の「ココシュカ」で調べると、決まって外国の画家の顔が映し出されます。

でも、この駅の北側の飲食店街に昔からいる人たちはみんな「ココシュカ」を知っていました。

自分の店の後片づけが済むと、彼らは時々路地に入って「ココシュカ」のカレーを食べに行きました。すっかり夜も更け込んで、飲食店はほとんど閉まっているのですが、「ココシュカ」はいつ訪れても入口の鍵が開いていました。

カランカランと鈴が鳴り、カウンターの向こうの白髪のコックが「いらっしゃい」と言って鍋の中身をかき回します。

「ココシュカ」の店主は、もう四十年以上ここで店をやっているはずで、髪は立派な白色でしたが、ちっとも老人に見えませんでした。五十代そこそこ、といったところです。

お客は皆、カウンター席ではなくテーブル席につきました。というのも、テーブル席からは美しい夕焼けの海が見えるのです。

N市は海に面した街でしたが、「ココシュカ」のある地域から浜辺まではかなり距離がありました。それに、店があるのは裏路地も裏路地。海なんて見えるはずがないのです。でも、「ココシュカ」のテーブル席からは、すぐそこという所に波打ち際が見えました。スクリーンの映像ではありません。ちゃんと潮の香りがしますし、寄せる波の跡も、海水に押される砂の粒も、一々違った形でした。

お客たちは夕焼けの海を眺めながら、「ココシュカ」の唯一のメニューであるライスカレーを食べました。

店主はちょっぴり頑固なところがあるのです。店を始めた頃からずっと、「ココシュカ」のカレーは「ライスカレー」でした。カレー・ルウがライスにかかっているのが「ライスカレー」、別々になっているのが「カレーライス」というわけです。

昔、あるお客が

「カレーライスじゃなくてライスカレーなのね。私はずっとカレーライスが正しいと思っていましたけれど」

と言いました。すると店主は微笑んで、小皿にカレーをすこし乗せて味見をしてから

「子どもの時からライスカレーだと思って作ってきたものですから。本当のところ、ライスカレーかカレーライスか、どっちが正しいのか、私自身わからないのです。もしかしたらカレーライスが本当の名前なのかもしれませんが、今さら名前を変えるのもあれですから、私はこれからもライスカレーを作るつもりで人参を切ろうと思

います」
と答えました。
店主はこういう人なのです。そしてお客も、店主のこういうところが好きでした。

毎日三食カレーを食べないと気が済まないという男がいました。彼は自分のことを「カレーの市民」と呼び、そして他人にもそう呼ばせました。
カレーの市民は俳優でした。しかも、知らない人はいない、テレビで見ない日はないというほど有名な俳優でした。ホワイト・ライオンのような威厳のある顔つきで、鼻の下に立派な白い髭を蓄えていました。
撮影の合間に、カレーの市民は欠かさずカレーを食べに行きました。一軒だけではありません。ロケ地の付近にあるカレー屋を片っ端から訪ねていくのです。カレーの市民はありとあらゆる街で撮影をしたことがありましたから、当然ありとあらゆる街のカレー屋に入ったことがあります。
そうして、カレーの市民はついに自分が調べられるかぎりの店をすべて訪れました。図書館で「カレー」の文字がある本をすべて読破し、インターネットやグルメ雑誌に載っているすべてのカレー屋の記事に目を通し、カレー通の友人や、カレーのことならすべてを知っているという専門家に聞き込んで、全国各地のカレー店のカレーを食べたのです。
カレーの市民はマラソンを走り切ったような達成感に浸りました。ところが、その達成感はすぐに消えてしまいました。
まだこの国には、自分が訪れていないカレー店がある。
それは毎日欠かさずカレーを食べ続けた彼だから感じることのできる予感でした。カレーの市民は心の中に、たった一つだけ嵌まっていないパズルのピースがあるのを感じました。なんとかしてそれを見つけなければ、とカレーの市民は決意しました。
こうしてカレーの市民は、未だ知らないカレー店を探す旅に出るべく、突然芸能界を引退しました。彼は独り身でしたから、遊園地ほどの大きさの家や、映画祭で手に入れたトロフィーや宝石やらを売り、その金を旅費に充てることに何ら躊躇しませんでした。あの店が見つかり、まだ食べたことのないカレーを味わうことができたのなら、もう死んでもいいとさえ思いました。
カレーの市民は北海道の先端から出発しました。最初は車に乗って、行く先々の人たちにカレー屋がないかを聞いて回りました。情報を集めるのにはとても時間がかかりました。ホテルに何十日も泊まって、まるで探偵のようにカレー屋について調べるのです。しかしどこも一度訪ねたことのある店でした。
本州に渡り、青森から順番に街を巡りました。千葉県で車が壊れてからは電車で移動をしました。とくに東京――彼が長年暮らし、仕事をしてきた街――は入念に探しました。灯台下暗しということわざがあるように、思わぬところにあの店があるかもしれません。しかし、店は見つかりませんでした。
電車を乗り継いで、カレーの市民の旅は続きます。関東を巡り、そこから日本海側、そして太平洋側を探しました。この頃になると、カレーの市民が拠点にするホテルはこれまで泊まっていた高級なものからだいぶ質素なものになりました。長旅でお金がなくなってきていたのです。
雲よりも高い山の頂上にある山小屋も訪れました。山小屋が出すカレーは案外おいしいのです。しかしそこの店にも、以前訪れたときに書いたカレーの市民のサインが飾られていました。カレーの市民はがっくりとして、下りの崖から危うく落ちそうになりました。
近畿、中国、四国、九州。どこの店も知った店です。もうお金もだいぶ減って、カプセルホテルが彼のねぐらになっていました。
最後の望みを託し、沖縄のカレー屋を巡りましたが、結果は同じでした。店主たちはカレーの市民の顔を見ると、「みーどぅーさん！（お久しぶり！）」と声を掛けました。その声があまりに優しかったものですから、余計にカレーの市民は悲しくなりました。
ホテルに泊まるお金もなくなって、公園のベンチに横たわりながらカレーの市民は考えました。もうすべてのカレー屋を訪れてしまったのかもしれない。すべてのカレー屋を訪れることが夢だった彼にとって、それは喜ぶべきことなはずでしたが、彼の心は沈んでいました。この国のカレー店を制覇したことよりも、ずっと探し求めた「まだ見ぬカレー店」が存在していなかったことのほうが、ずっとつらい事でした。
カレーの市民が北海道から旅を始めて、もう二十年が経ちました。もうすっかり老いぼれて、自慢の顔も皺くちゃでトレードマークの白い口髭は荒れ放題でした。彼自身、沖縄の店主たちが自分のことを認識できたことが不思議でならなかったのです。
カレーの市民は背中を丸めて、仕方なく東京に帰ることにしました。東京に帰ることがなんとかなるような気がしたのです。でも実際は、東京に行ってどうやって生きていくか、あてがありませんでした。
もう残りの旅費はわずかでした。寄り道はせずに、東

京に戻る最も近道を行きました。
ところが、東京に着く前に旅費が尽きてしまったのです。最後に降りたのは、東京よりだいぶ手前のN市の駅でした。
カレーの市民はしばらく駅舎のベンチに腰をかけて途方に暮れていました。最早東京まで歩いていく体力もありませんでした。これからどうしようかと思っているうちに、ホームには何本も電車がやってきて、そのたびにたくさんの乗客が乗り降りしていきましたが、そんなことを気にする余裕もありません。
気が付くと終電時刻になっていました。ベンチで座っている彼を見つけた若い駅員が、駅の外まで運んでやりました。カレーの市民はひとり駅前に残されました。もう死んでもいいのではないかと思いました。
そのとき、カレーの市民のお腹が鳴りました。旅費を節約するために、ろくなものを食べていなかったので、カレーの市民はとても空腹だったのです。
空腹なまま死ぬのはあまりにも惨めです。体も心も弱ったカレーの市民でしたが、そんなふうに惨めに死ぬのはどうも耐えられませんでした。せめて何か食べてから死のう。ポケットを漁ってみると、幸いにも汚れたハンカチと一緒にぐしゃぐしゃの千円札が出てきました。カレーの市民は飲食店のネオンが美しい通りを歩いていきました。
通りには色々な店がありました。レストラン、居酒屋、牛丼屋、寿司屋、焼き肉屋。しかしどの店もきれいさっぱり清潔で、汚れた身なりの彼が入るのは少し憚られました。
カレーの市民の足は自然と路地裏に向かいます。路地裏は散らかっていて、歩いていても気が楽でした。
妙な香りがします。カレーの市民は鼻をひくつかせました。嗅ぎ慣れた香りです。香ばしくて、スパイスと一緒に肉や野菜が煮られているのが彼にはわかりました。
カレーです。どこかでカレーが煮られているのです。お腹が大きな音をたてました。
カレーの市民はその匂いを辿りました。路地裏は明かりがかすかで、足元も見えませんでしたが、カレーの市民は匂いに引っ張られるように歩き続けました。
やがて古いビルディングが現れました。カレーの香りはここから来ているようです。カレーの市民がドアを開けると、目の前にエレベーターがありました。そこに乗ろうとすると、カレーの市民は入口のわずかな突起につまずいて転びました。その衝撃でエレベーターは大きく揺れ、そのまま下へと向かい始めました。
カレーの市民は顔を上げました。エレベーターの扉が開いた先に、一軒のカレー屋がありました。看板には「ココシュカ」と書いてあり、どうやらこれが店の名前のようです。
転んだときに打ち付けた肘をさすりながら、老人は店の扉を開けました。さっきまでうっすらと感じていたカレーの香りがいっぺんにやってきました。
「いらっしゃい」
カウンターの奥で店主らしい男が声をかけました。
「ああ、あの、カレーをください。何でもいいんだ。千円以内で食べれて、その中でいちばん美味しいものを」
「うちの店はライスカレー一品しか扱っていないんです。不器用なものですから。七百円ですがよろしいですか」
「ライスカレーということは、ライスの上にソースがかかっているんだね？」
「その通りです。うちはずっとライスカレーと呼ばせてもらってます」
「ライスカレー……懐かしい響きだ。うん、それで頼むよ」
「お客さん、このお店は初めてですか」
「はい」
「やっぱりそうでしたか。このあたりではなかなか見かけない顔だと思いましたから。よかったら、奥のテーブル席にどうぞ。夕焼けが綺麗です。この店に来るお客様は、みんなテーブル席で食べるのです」
老人は店主が指さしたほうを見ました。テーブル席が三つほどあり、その奥に美しい夕焼けが広がっていました。
ほんとうに美しい夕焼けです。電車で旅をしている間、車窓から何度も夕焼けを眺めましたが、この店から見える夕焼けは、その何倍も鮮やかで、そしてほんのりもの悲しいものでした。
老人はテーブル席に着きました。すぐに店主が何かを運んできました。
「こちら、カレーの付け合わせのじゃがいもです。ライスカレーはすぐにお持ちします」
テーブルに置かれた皿の上には、皮付きのままふかされたじゃがいもと、バターが一欠片のっていました。
「ライスカレーにじゃがいも？　ソースとライスが別々のところにじゃがいもが来ることは時々あるが、ライスカレーにじゃがいもが付くのは初めて見たな」
「はい。うちはずっとこういうスタイルでやっているんです。じゃがいもを無しにしたほうがよろしいですか？」
「いや、このまま頂くよ。こういうこだわりは好きなんだ」
「お客様はずいぶんカレーを食べ慣れてるんですね。お

話を聞いていると、どうもカレー通の話し方なように感じます」
　老人は微笑みました。
「昔はそう呼ばれもしたが、今はそんなことはどうでもいいような気がするんだ。夕焼けが綺麗だし、それにとてもお腹が空いているからね」
　店主はにこやかに頭を下げると、カウンターの奥に消えていきました。
　老人はライスカレーが来るまで、夕焼けの揺れるのを眺めていました。夕陽の輪郭が光とともにぼやけるのを見ていると、とろんと眠りに落ちてしまいそうな気がしましたが、カレーが煮えるコトコトという音が聞こえて、老人の意識はふたたび卓上のじゃがいもに向かいました。

終